



明るい配色の南国感漂うロゴ。「患者さんとスタッフが手を取り合って一緒に希望に向かっていくクリニックを目指したい」と、院長自らが下書きをしてデザインを起こしてもらったそう。

「自分が楽しいのは、偉くなること、手術

をたくさんやることではなく、外来で患者さんと冗談を言つて笑っていること」。開業

基本は人の手で治すこと

受付を右手に進むと、青空に雲が浮か

ぶユニークな天井が広がっていた。四方から

外光が差し込み開放感のあるリハビリ

テーションルームだ。ここでは専用機器の設

置を最小限にし、患者さんの意向を尊重

しながらも、できるだけ理学療法士の手

で治すことを主軸としている。理学療法

士とのカンファレンスでは、僕が手術をした

症例の所見を解説したり、理学療法士から



医療法人 いしだ整形外科

〒880-0824 宮崎県宮崎市大島町原ノ前1444番1
TEL:0985-77-8341

Interview with
Yasuyuki
Ishida

患者さんが主体の チーム全員医療で地域を支える

宮崎駅から車で約6分。患者さんが通いやすい場所であることを第一条件とし、駐車場も広く取れると選び抜いたこの土地で2019年に開業した「いしだ整形外科」。飲食店が多く立ち並ぶ幹線道路沿いにあるのを「ごはんがいつでも食べられるのが僕らしい」と院長の石田氏は笑顔をのぞかせる。豊富な手術経験で得た知見を活かし、近隣の医療機関と連携して肩肘関節外科の専門的な治療にあたりながらも、目指すのは「患者さんが喜ぶ」医療を提供しつづけること。立場や年齢、症状を問わず、患者さんやスタッフと対等な姿勢で現場に臨む石田氏に、医師としての思いやチームづくりの考えなどを伺った。

いしだ やすゆき
石田 康行氏 医療法人 いしだ整形外科 理事長

PROFILE

長崎県出身。1996年宮崎医科大学卒業。同大学整形外科に入局し関連病院で研鑽。2006年船橋整形外科スポーツ医学センター肩、肘関節外科研修。宮崎大学整形外科助教、講師を経て、2019年1月 いしだ整形外科を開院。

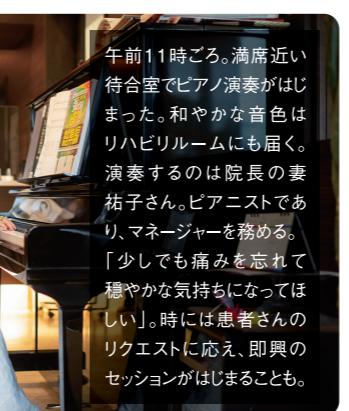


野球部のような チームワークを大事にする

印象に残ったことがある。職員のみなさんが必ず元気な声で挨拶をして帰る様子だ。自然に会話をするよう、皆が声をかけ合っている。そのことを伝えると、「野球部のような病院にしたいんですよ」と石田氏は笑顔になった。小児期より大学まで野球に明け暮れた石田氏。「こんな医者がいてもいいんじゃないか?」と、体育会系の部員は医者になれないと揶揄されてきた世の常識を覆す思いで、医学の道を目指した。自分を育ててくれた野球経験は、開業してあらためて役に立つているという。

「ミスがあれば、カバーし合い、元気がない開業してあらためて役に立つているという。診療終了後、話しを伺っているときに『ミスがあれば、カバーし合い、元気がない』

人がいれば、声をかけ合うようなチームにしたいと職員には伝えてきました。特に挨拶は徹底しています。コミュニケーションのきっかけになり、第一印象が大きく変わりますから」



午前11時ごろ。満席近く待合室でピアノ演奏がはじまつた。和やかな音色はリハビリルームにも届く。演奏するのは院長の妻祐子さん。ピアニストであり、マネージャーを務める。「少しでも痛みを忘れて穏やかな気持ちになつてほしい」。時には患者さんのリクエストに応え、即興のセッションがはじまることも。



リハビリテーションルームでの施術風景。理学療法士一人に1台のベッドで施術を担当する。

治療内容の解説をしてもらつたりしていました。理学療法士には、そういう学び合ひのなかで成長して、「自分流派」を作つてもいいと思っていました。互いの専門分野を持ち寄り、チーム一丸となつて治療のレベルをあげていくことが大事と石田氏は強調する。

患者さんがまた来たくなる 病院にしたい

患者さんの層は幅広い。日中は高齢の方が多く、平日夕方4時を過ぎると、若年層が一気に増えてくる。学校帰りの学生が、待合室にはカウンターチェアを設け、自由にWi-Fiが使えるようにしている。

若年層の中には、野球肘の患者さんも多い。その背景には、10年続いている大学

病院と連携して年1回実施する「野球

検診」がある。県の少年野球チームが対象

のこの取り組みは、多い時には一度に600

人ほどが参加する。ここで検診を受けた

学生がいしだ整形外科を受診することも少なくない。

治すのは当然のこと、患者さんが来た

くなる病院を目指したい。石田氏は、選ば

れる病院になるためには、患者さんとの信

頼関係をいかにつくるかが大事だと話す。

「バタバタしているときでも、もう一言声

をかけたいと思っています。患者さんの中には痛いところを説明したあとに、「もう歳だからでしょ」、「太つてるからね」と言ってくる人がいるんです。その人たちいろいろなところでそう言われて傷ついていて、そう言われないよう、自分から言つてしまふんです。だから僕はそういう時に、大きな声で、そんなことはない! と言う。今まで頑張ってきたからですよと。そうすると患者さんは、ニコッと笑つて、安心して、また来てくれるんです」

予約制を設けないのは、患者さんが来たい時に来てもらえるように。雨に濡れないようになると建築士と相談して広いひさしと玄関屋根をつけた。始業前に並んでいる患者さんから「ベンチがあると助かる」と聞けばすぐに設置を決める。徹底した患者目線を貫き、どこまでも正直にまつすぐ。患者さんが中心にいるチーム全員医療で地域を支える。